魂を喰らう転生者　～厨二病な聖剣とゼロから最強へ成り上がる～

浦糸　香

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コンビニからの帰り道、突如として次元の狭間に吸い込まれてしまったヒュウガ。気づいたら彼は何と、人魂になっていた！　異世界と思われる世界に強制送還され、手も足もない、あるのは魂だけというあまりにも残酷すぎる状況に置かれてから、彼は四苦八苦しながらも、成り上がりを始めていく。

そんな彼は人魂から他の生き物の魂を喰らい、それを使役できる『喰魂魔』、別名ソウルグールへと成長し、道中で何故か中二病な美少女に変身する伝説の聖剣を手に入れたり、奴隷の女狐メイドと出会ったり、調子に乗る勇者に喧嘩を売ったりして、沢山の戦いや出会いを経験する。

そして、やがて彼はこの異世界の大波乱へと巻き込まれていく……。

これは魂を喰らう悪魔となった脚フェチ変人と人化した中二病聖剣による冒険譚である。

この聖剣、抜剣した瞬間に俺を浄化し――ギャアアアア!!

目　次

第一章　ゼロから人魂転生
第1話　プロローグ　―転生―　1
第2話　気づいたら人魂でした　8
第3話　人魂ＶＳスケルトン　―　15
第4話　レベルアップ……？　―　22
第5話　『喰魂』の力　―――　29

第一章　ゼロから人魂転生

第1話　プロローグ　―転生―

「はぁ……、かったるいな」

ゲームのやり過ぎで凝りに凝った肩を叩きながら、俺はコンビニから自宅への帰路を早歩きで進んでいた。

先程まで朝だと思っていたけど、既に空は真っ黒に染まっていて、時計の短針は１０と１１の間を指している。

俺は如月彪雅（きさらぎひゅうが）。特に秀でている事もない平凡な男性だ。

無駄に整っている顔とカッコいい名前さえ除いてしまえば、勉強や体育、身長、体重まで、何に関しても俺は平凡だ。

顔や名前だけが一人歩きし、俺は自身の能力に見合わない評価をされる毎日――そんなつまらない訳でもなく、楽しくもない日々を送っていたある日、俺はゲームをするようになった。

ゲームは面白かった。

俺の何もない人生を華やかにするようで……、とても有意義な時間だ。

確かに幼き俺には妹や親友がいた時期もあった。だがそれらは全て、尽く破壊されていき、最終的に俺の手元に残った物はゲームだけだった。

だからこそ、俺は決めたんだ。俺はゲームに人生を注ぐと。

大学を卒業して以来、俺は家に引き篭もる日々を送り、堕落した毎日を送っている。

仕事をしたくない訳じゃない、ただそれ以上にゲームへとのめり込んでしまっているだけ。

親のスネをかじり始めて早2年――俺は23歳ながらも、ゲーム廃人の道を辿っているのである！

「取り敢えず、早く帰らねば！　愛しのマイちゃんが待ってるからね！」

現在攻略途中のエロゲーを頭の中で思い浮かべながら、コンビニ袋の持ち手を握りしめると、走り始めた。

我ながら、かなりの屑だ。だけど……、あのエロゲーはマジで面白いんだ！

そこら辺に売っている様な適当なギャルゲーとは違う、ストーリーは洗練に洗練を重ねられ、キャラの性格もとても個性的、あんな神みたいなゲームには早々出会えないぞ！

特にお気に入りのマイちゃんは最高だ。あの適度なツンデレ具合と、少々天然っぽくて中二病なのが堪らない！

少なくとも俺にとっては、あの髪色や目の配色、服装までも全てが完璧と言わざるを得ない。

さて、家に帰ったらどんなプレイをしてやろうか。グヘヘ……。

人通りが皆無な通りで、顔には見合わないであろう、気味の悪い笑いを浮かべていたその時だった。

目の前のＴ路地、家とは反対側の通路奥から何やら子供の泣き声が聞こえてきた。

「こんな時間にか……？」

もう既に１０時は回っているはずだ。普通なら家に帰っていてもおかしくない。

もしかして……、幽霊かなんかなのか？　それはそれで興味深いけど、取り敢えず放っておく訳にもいかないな。

俺はおっかなびっくり、そちらの方へ曲がって、先を見るとそこには世にも奇妙な光景が広がっていた。

俺から数メートル先には、６歳ぐらいのフードを被った小さな少女が泣きじゃくりながらも、こちらを向きながら、ルームランナーでもあるかのようにその場で駆けていた。

そして、彼女の後ろには何やら空間に亀裂が出来ていて、その中からは青紫色の気味が悪い空間が覗いている。

な、なんだあれ？　一体全体何がどうなってるってんだ!?

「助けてぇ！　吸い込まれるよぉ！」
少女は涙で頬を濡らしながら、こちらに助けを求めていた。
深いフードで目は見えないけど、そんな顔で助けを求められたら……、黙っている訳にもいかないじゃないかよ！
クソッ、マイちゃんもうちょっと待っててくれ。この坊やを助けたら直ぐに行くからな。
俺はコンビニの袋を地面に投げ捨てると、急いで少女の元へと駆け寄り、力づくでその子をその謎めいた亀裂から引き離そうとする。
「ぐぬぬぬ……っ！」
伊達にゲームで連打を鍛えている訳じゃないって事を、証明してやる……！
何とか足を踏ん張り、少女を自分の胸元まで引き寄せると、俺自身が亀裂に背を向け、彼女が吸い込まれない様に庇った。
「ふう、もう大丈夫だぞ」
俺は泣き止ませるため、抱き寄せた少女の頭を優しく撫でたのだった。
ゲーム廃人の俺にもこんな気持ちがまだ残っていたんだな……。
そんな事を思っていた矢先――少女は顔を上げて、こちらを見ると静かに笑った。
「あ、ありがとう、お兄ちゃん。それじゃ……」

そう言うと少女は子供とは思えないほどの怪力で俺を突き飛ばしたのだ。
突然のことに俺の思考は完全に停止する。だが、重力をも無視するような凄まじい吸引力を身で感じた時……、俺は恐怖のどん底に落とされたのだった。
「お、おい嘘だろ!?　ちょ、ちょっ……、うわぁあああああ!!」
浮遊感があっという間に全身を包み込む。身が縮み、骨が砕けそうな程強力な圧迫を受けた俺は情けなく絶叫した。
そして、気づいた頃に俺はあの青紫色の空間を彷徨っていた。
辺りには赤色や緑色の稲妻が迸り、時間や空間全てがぐにゃりと曲がったような感覚だ。
全身が捻られていく様な激痛、意識は既に朦朧とし始め、頭の中が真っ白になっていくようだ。
ふと顔を上げると、亀裂の向こうにある俺の世界ではあの少女が張り付いた様な笑みを浮かべていた。
「どうして……、だ」
命を掛けて助けた少女の姿を目に映しながら、俺は薄れゆく意識をゆっくりと手放した。

※　※　※　※　※

彪雅が虚空に空いた亀裂に吸い込まれた後。
あの謎めいた亀裂は音もなく消え去っていき、彼をこの世界から追放した。
そして、その細い路地に残されたのはフードを深く被った謎の少女、ただ一人だった。
「ふふっ、相変わらずこの世界の人間は弱っちいジェロ」
彼女はフードの奥から紅蓮の瞳を覗かせると、にししと歯を出して笑った。
この路地の両側には家は殆どなく、数メートル程空き地となった広場が続いている。
その為、余程の事がない限り、この異変を見ている者はまずいないだろう。
少女は周囲の様子を確認すると、彼女の足首まであるローブのポケットから何やら赤紫色に輝いた石を取り出した。
「こちら……よ。たった今、当該人物の〝転生〟に成功したジェロ。……はい、了解ジェロ」
電話の機能でも果たしているのだろうか、それだけ喋るとその少女はその奇妙な石をポケットにしまった。そして、その場で不気味な笑みを浮かべる。
「ヒュウガ＝キサラギ……。精々、頑張るんだジェロ。君があたし達の――最後の望みなのだからね」

紅蓮の瞳を怪しく輝かせた少女はそれだけ言い終えると、光の粒子となり、その場から跡形もなく消えてしまったのだった。

第2話　気づいたら人魂でした

あれからどれほどの時間が経ったのだろうか。
俺は不意に襲いかかってきた不思議な感覚に目覚めた。
何だか、体全体がフワフワとした様なとても心地いい感覚だけど、少し妙な浮遊感だ。
まるでいつ落ちるか分からない、そんな崖っぷちに立たされている気がする。
目の前にあるのは――洞窟の壁か？
光源がどこにあるかは分からないが、辺りの様子はしっかりと確認できる。
天井も青い岩肌、地面の青い岩肌だ。となると、ここはどこかの洞窟なのか。
まさか、死んでしまった俺を誰かがこんな陰気臭い所に投げ捨てて……。
いや、多分違うな。だって俺の最後の記憶は、アニメとかでよく出てくる次元の裂け目の様な物に吸い込まれた所だ。それに死んでいたら、意識なんてとうにないでしょうに。
ところで、この浮遊感ずっと続いているけど、俺は今どんな状態なんだ？
不思議に思った俺は自身の手を見てみようとした。
だが、本来あるべき場所にそれはない。というか、どこにも見つからなかった。

しかも手に限った話じゃない、足も胴体も、どこにもないじゃないか！
この状況――物凄く嫌な予感がする。
どこか……、どこかに水面はないのか？　鏡の役割を果たすような物はないのか!?
俺は急いでフワフワと身体を宙に浮かばせながら、辺りを探索してみる。
すると、俺の数メートル手前に、洞窟の地面にちょっとした水溜りが出来ていた。
やけに都合が良いな、それはともかくあの程度の水溜りなら俺の顔も見られるはずだ。
恐る恐るながらも、俺はその水溜りを上から覗いてみる。
その水面に写っていたのは――青白い炎だった。今にも燃え尽きそうな程小さな炎だったのだ。
何故かは知らないが、真ん中には可愛らしいつぶらな瞳がついている。
何だこの炎……。
ちょっとまてよ、まさかとは思うけど。
水面に写る炎をジッと眺めていた俺は試しに身体を右に動かしてみる。
するとそこに写っている炎も、右へと動いたのだ。
次に俺は身体を左に動かしてみる。案の定、水面の炎も左へと動く。
……何だと？

という事はまさか、俺は宙に浮く炎になってしまったのか!?
しかもこの青白い炎、例えるとするなら、人魂。

そっか、俺は死んじゃったんだな。

脳裏に蘇ってくるあの光景。
助け出した謎の少女に突き飛ばされ、亀裂の中へと吸い込まれていった記憶。
つまり俺はあの時死んで……、人魂として化けて出たと、そういう事だな。
そんな……、俺は二度とマイちゃんに会えないというのか!?
あの神にも等しいエロゲーや有名なＲＰＧゲームも二度とプレイできないとでも言うのか!?
一人部屋に閉じこもりながら、ティッシュを用意して、オ○ニーで自分を慰めることも出来ないのか!?
嘘だろ……。
俺の人生その物と言っても過言じゃないゲームが、もう二度とプレイできないなんて。
クソッ、こんな事になるならあの少女なんて助けるんじゃなかった!

あの少女と最後に見た妹の姿と照らし合わせ、無駄な幻想を抱いたばかりに、俺はゲーム人生を全て投げ捨ててしまったのか。

……嘆いても、仕方ないな。

死んじゃったんだし、もう諦めて成仏するしかないだろうに。

こうして、俺は全身の力を抜いて、ゆっくりと目を閉じたのだった――

――成仏ってどうやってするんだ？

なんかお祓いとかしてもらえれば、出来るのかな。

というかそもそも、ここはどこなんだ？　日本なのか、外国なのか、そもそも地球なのかも分からない。良く良く考えてみれば、青い岩で出来た洞窟なんて本当に存在するのか？

これは少しばかり、探索してみた方が良さそうだな。

今の俺にあるのは人魂になったという情報だけ、これでは状況判断も糞もない。

探索、それはＲＰＧに於いては基本中の基本でありながら、最も大切な作業。これを怠っては大切な情報が得られず、高難易度のＲＰＧはクリアすることも出来ないと言われている。

それは街や王国などに限った話じゃない、こういう洞窟にも思わぬ情報が潜んでいる

事もある。
ともかく一旦、マイちゃんの絶対領域の事は忘れよう。
自分の状況を知るため、この謎めいた洞窟を回ってみようじゃないか。
心の中で深呼吸し、冷静さを取り戻した俺はフワフワと身体を動かしながらも、辺りを探索してみることにしたのだった。
※　※　※　※　※
薄暗い洞窟の中を人魂として動き続けること数分。
俺は世にも悍ましい者と遭遇してしまった……。
いや、確かにゲームやら、仮装やらで見たことはあるのだけど。
まさかご対面する日が来るとは夢にも思っていなかった。
洞窟の通路の真ん中、その中央に佇んでいるのは何と動く人体模型――ではなく、動く人骨だった。
動く人骨、つまりゲームや神話用語などで表せば、スケルトンと言う奴だ。
ゲームの雑魚キャラでお世話になっているし、お目にかかれるのは非常に嬉しいのだが……、現実で見るとやはり不気味だな。
――カタカタカタッ！
スケルトンはポッカリと空いた目の窪みをこちらへと向けると、まるで笑っているか

のように骨を軋ませた。
生き物は骨だけでは動けない、それは自然の絶対なる摂理である。
だが、スケルトンはその摂理を嘲笑うかのように俺の目の前に立っていたのだ。
化け物同士、姿は見えるようだな。
だが、こっちは既に霊体なのだ。攻撃やらの心配はないはずだ……。
こんな物を見せられると、本当にこの世界が俺の元いた地球なのかすらも、怪しくなってくる。
下手したらここ……、地獄の底なんじゃないか？　或いはお化けとかが集結する世界だったりしてな。
どちらにせよ、溜まったものじゃない。
一先ず、この謎の洞窟にはスケルトンが存在する！　それだけでも情報価値はある。
よし、引き続き探索を続けるとしようか。
そう思って、スケルトンの横をすり抜けようとしたその時だった。
先程までは人魂である俺を見守っていたスケルトンが突然、俺に殴りかかってきたのだ。
その拳の速さは俺でも分かるぐらいに遅かった。
だが、フワフワとしているせいか、俺はその拳を咄嗟に避けられず、その身に受けて

しまう。

――グフッ!?

霊体なんだ、どうせすり抜けるだろう。

そんな俺自身の過ちを擁護するような淡い期待は、全身を走り抜けていった非情なる痛みによって容易に打ち砕かれる。

そして、人魂である俺は何も出来ず、そのまま吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

――ば、馬鹿な。てっきり俺は霊体だと思っていたが、違うのか?

それか、あのスケルトンも霊体なのか?

ともかく、今はそんな事どうだっていい。

二度も死ぬような痛みに晒されてたまるか、全身全霊で抵抗してやる!

俺は拳を構える――自分の姿を想像して、スケルトンと対峙した。

第３話　人魂ＶＳスケルトン

薄暗い通路、寒々しい青色の岩壁をバックに俺はスケルトンの姿を睨みつけた。
どこに胴体があるのかも分からない様な風貌の癖して、身体の到る所からヒリヒリとした痛みがする。
もし人間だったら「イッテェ！」とか言っている所だろう、だが今の俺には口というものがない。声を出したくとも出せないのだ。
スケルトンは俺を冷やかすように骨を軋ませると、こちらに向かって走り始めた。
だが、そのスピードは俺が想像していた以上に遅かった。
それもそうか。なにせスケルトンとは骨だけの魔物。骨には筋肉が無いのだから、何か魔法的な力がない限りは上手く体を動かせないのは当然と言った所だ。
しかし残念ながら、スピードが遅いのは俺とて同じだ。気を抜いたら直ぐに相手のペースに乗せられ、あっという間に決着がついてしまうだろう。
俺は何とか身体を動かして、スケルトンの突進を回避する。
こっちだって、伊達にＶＲＭＭＯ系のゲームをやっている訳じゃない。流石に剣道や柔道の経験者には届かないが、それなりに攻撃を回避することは可能だ。

それに俺の回避技術は全てゲーム特化だ、この様な魔物の攻撃を避けるなど俺にとって見れば意図も容易い！
だが……、問題なのは俺には攻撃たる手段が無いことだ。
スケルトンには手や足があるかもしれない、けれど俺には手足どころか、今に消えてしまいそうな火の球に似た頭（もしくは胴体）しか無いんだよ。
つまり攻撃するには少なくとも、突進しなくてはいけない。
だけど、こんなに小さい上、スケルトン程の速さしか出せない。
あっ……、これはマジで詰んだかもしれないぞ。
ＲＰＧでいう、最初の職業をナメクジやスライムに設定した位に最悪の状況だ。
ど、どうすればいいんだ！　マジでどうすればいいんだよ！
待て待て、一先ず落ち着こう。
俺の悪い癖だ、こういう時こそ冷静にならなくちゃ、話は始まらない。
俺は心の中で「帰ったらマイちゃんと○○○するんだ！」と５回連呼すると、想像上で深呼吸した。
先程突進を避けられたスケルトンは既に態勢を整え、こちらに向かって走り出そうとしている。
避けるのは簡単だ、しかし攻撃手段が無ければ勝つことなんて到底不可能。それにこ

こで逃げ出した所で今の速度では追いつかれてしまう。
またこの場所には特殊なギミックもない。言わばＲＰＧで言う闘技場ステージだ。
纏めると、問題なのは俺の移動速度――これさえ改善できればこの難関を突破できる可能性を見出せるはずだ。
スケルトンが地を蹴って走り出す。
避けなければならない、避けるんだ。避けるんだ！
俺は脳裏にスケルトンの攻撃を回避する映像を思い浮かべると、スケルトンがこちらにぶつかる直前、俺の身体は想像通りに動く。
――ガタカタガタッ！
スケルトンが壁にぶつかり、色々な箇所の骨が外れる。
そして、奴は面倒くさそうに骨の装着を始めた。
どうやら暫く、こちらに来ることは無さそうだ。
ならばこの隙に確認させていただこう。
――この身体の動作は、俺の意識の強さが反映されているのではないかと。
俺は試しにスケルトンに突進しろ！　と心の中で連呼し、俺の身体が拘束でスケルトンに衝突する想像をした。
すると、突然俺の身体はスケルトンに向かって豪速球の如く飛んでいった。

そしてその蒼い火の球、もとい俺は、スケルトンの身体に当たる肋骨に命中、肋骨の一部にヒビが入る。

イッテェエエエ！

そうだった、忘れてたぜ。突進って反動ダメージをくらう、諸刃の剣だってな。

スケルトンから出来るだけ距離を取ると、俺は歯を食いしばる――想像をした。

それに今ので、何故かは知らんが俺の身体が軽くなった気がする。

どういう原理なのかも知らないし、想像の範疇でしか無いけど、もしかしたら人魂こと俺は急激な運動をしたら小さくなるのかもしれない。

それはつまり、この突進を含めた急激な行動には時間制限があるってことだ。そして、その制限以上、動いてしまうと俺は消滅する可能性がある。

そうだな……。ざっと見積もって残り3発くらいか、突進が使えるのは。

加えてだ、俺の身体もいまの突進を連続3回耐えられる程、頑丈ではない。

何せ、頭をコンクリートの壁に思いっきり叩きつけた様な痛みだったからな……。

さっきは冗談抜きで死ぬかと思った。

スケルトンは腹を立てたのか、ヨロヨロとしながらも骨を再度はめ直すと、ゆっくりと立ち上がり、手を振り上げると先程よりも速い速度でこちらに突っ込んでくる。

まだ動けるようだが、結構ダメージは食らっているようだな。

となれば……、奴を倒せる可能性が少なからず上昇した。
自身の仕掛けに気づいた以上、敵の攻撃を躱すのは容易い。その上で、俺は回避しながら敵を効率的に倒す方法を模索しなくてはならない。
ここで重要となってくるのが敵の弱点の見極めだ。
これはＶＲＭＭＯでも相当重要な技術なのだが、生物という物、必ず何かしら防御が弱いところがある。
例えば、成人男性系の敵なら首と股間、ゾンビだったら頭または心臓。そんな感じに必ずどこかしらに弱点があるのだ。
つまり何が言いたいか……。
俺は賭けるのさ、このスケルトンの弱点が頭である事に全てを賭ける。
スケルトンは俺の意識突進で倒せることは分かった、だけどそれを乱発しては、俺の身体は確実と言ってもいいほど持たない。
次の一撃に俺は全てを賭ける。確実に止めを刺してやる！
俺は全意識をスケルトンの動きに集中させると、スケルトンを壁際まで誘導し、奴の拳が俺にぶつかる直前に避ける。
スケルトンは壁に拳と頭をぶつけると、情けなくその場に座り込んでその場で首をグルグルと回し始めた。

混乱している――間違いねぇ！

あそここそ、スケルトンの器官全てを支配している司令塔、即ち弱点だ！

全身にあの痛みが来る事を覚悟し、俺は全霊を掛けてスケルトンの頭に突進する事を想像した。

刹那、俺の身体は急速に加速していき、スケルトンの頭蓋骨目掛けて、渾身の一撃を叩き込んだ。

もし人間ならば、脳みそが飛び出てしまいそうになるほど凄まじい痛みが俺の全身を駆け巡った。

意識がどこか遠くへ飛んでいきそうだ……。

だが諦めない、折角全力を尽くした戦いを引き分け以下で終わらしてたまるかぁ！

薄れていきそうなその意識を、俺は必死に手繰り寄せるとゆっくりとその場を離れ、スケルトンがいたであろう場所を見た。

そこには頭蓋骨がバラバラに破壊された骨組みが、無残に散らばっていた。

た、倒したんだ……。

へ……、へへへ。やってやったぜ。

うっひゃひゃ！　人生でＲＰＧ１００作品以上極めてきた廃人を舐めるなってんだよ、骨野郎！

ひゃっほう！　万歳！　マイちゃん万歳!!

――ともかく、これで俺の二度目の死は免れたというわけだ。

一度目のあれが本当に死だったかどうかは知らんがな。

だが、こんな化け物が他にもうろついていると仮定したら、結構ヤバイな……。下手したら次の戦いで死ぬ可能性もある。

残念ながら、羽目を外している暇はなさそうだ。

そう思って、俺は２回り程小さくなってしまった身体を動かして、この場をいち早く離れようとした。

その瞬間だった、あの音声が響いたのは――

【経験値が一定値に達しました。当該個体、ヒュウガのレベル上昇許可申請を開始します――承諾。ヒュウガ、人魂ＬＶ１から人魂ＬＶ２に上昇しました】

【各種基礎ステータスが上昇しました】

【条件を満たしました。当該個体、ヒュウガに特性『特殊変異体』を付与しました】

【条件を満たしました。当該個体、ヒュウガに特性『喰魂（ソウルイート）』を付与しました】

……はい？　今なんて？

第４話　レベルアップ……？

……はい？　今なんて？
ちょっと、今なんて言ったのよ！　もう一回言いなさいよ！
って何でオカマ口調になってるんだ俺、別にそんな趣味がある訳じゃないんだけど。
はいはい、一先ず落ち着きましょう。
何事も情報を冷静に整理することが大切なのだ、取り乱しては思い出す必要のある重要な情報も、自ずと完全に忘れてしまう。
ともかく……、１つ１つ思い出せる限り考察していこうじゃないか。
俺は改めてスケルトンの死体から移動し始めると、どこか安全そうな岩陰に身を隠し、今の状況整理を始める。
まず、何よりレベル上昇だ。
確かあの機械音声は俺が人魂ＬＶ１から人魂ＬＶ２に上昇したと言っていたはずだ。
そしてそれに伴う基礎ステータスの上昇……、これに関してもＲＰＧお決まり事項。
ここから推測するに――どうやら、この世界自体がＲＰＧゲームの世界の様だ。でなければ、唐突にあの様な異常現象は起こりえないな。

それはつまり何を意味するか……。大量のラノベやらゲームをやって来た俺ならこの状況を判断するのはとても容易い。

――俺は異世界転生して、生まれて変わった。人魂という魔物に。

レベル上昇がもし俺の幻聴でなければ、そう推測せざるを得ないだろう。

まさか……、まさかのまさかだな。

ゲームの世界に放り込まれたにしろ、どこか別世界に飛ばされたにしろ、夢に見ていた異世界転生を成し遂げてしまうとは。

しかも、人外転生――俺の最も大好きなジャンルではないか！

最初の種族が人魂なのは些か心許ないが、そんな事は関係ない！　これは言わば一種の縛りプレイのような物なのだからな。

つまり、今までの情報を整理し到る結論は――

俺はあの少女に何らかの目的で、このＲＰＧゲームを主体とした異世界へと転生させられてしまった。

素晴らしいじゃないか！

クソみたいな人生を送ってきた俺にも、とうとう陽の光が差し込んできたようだな。

オタク人生に光りあれ、どうやら俺もまだ神に見放されていなかったようだな、フハハハ！

異世界万歳、チート万歳、マイちゃん万歳!!

……マイちゃんにはどう頑張ってももう会えないだろうけどね。

さて、もしここがＲＰＧ系異世界なのならばだ。

ステータスという、とても素晴らしい物があってもおかしくない。

いや、レベル上昇時に基礎ステータスが上昇しましたと言っていたんだ。間違いなく存在するはずだぁ！

今までラノベで読んできた世界じゃ、ステータスと口にしたり、心で喋ったりすると出てくることが多かったけど……、この世界はどうなんだろな。

いいや、考えるより実行に移そう。適当にやれば何とかなるでしょ。

――いでよ、ステータスッ!!

すっかり心が高揚しきった俺は心の中でそう叫んだ。

だが……、残念ながら肝心なるステータス画面は幾ら経っても出てくることはなかった。

……アホらし。

やっぱり、そう簡単に行くものじゃないよな。

大体、普通の異世界転生と違って神様のいる部屋から始まらない辺り、薄々と感づいていたけど。

これって、チート無し異世界転生だよね？

そう、所謂何もかもゼロから始まる異世界転生――転生系の中でも相当ハードな部類にはいる物だ。

チートで無双万歳とか出来ない奴じゃんこれ……。

いやいや、それでも流石にステータスが開けないのはマズい！　ステータス画面が見れないＲＰＧ程クソゲーはないぞ、そもそもＲＰＧゲームとして成り立っていないじゃんかよ！

焦燥感に駆り立てられ、俺は声に発することは出来ずとも、ステータスを画面を開く為の合言葉を思いつく限り言ってみる。

――ステータス、オープン！　カモン、ステータス！　開け、ステータス！

……駄目だ。やっている自分が段々馬鹿らしくなってくる。

クソッ、このパターン。恐らく鑑定魔法や何やかんやを使用しない限り、自分のステータスすらも確認できない奴だ。

最も現実的で、論理的なパターンだが、その分、転生ＲＰＧゲームに於いてはかなり高難易度になる場合が多い奴じゃんか。

うぅ……、まさか最初の最初で『チート無し、地図なし、道具なし、ステータス表示不可、人魂スタートの縛りプレイ』をするはめになるとは。

しかも、どっかの有名なラノベと同じで、ゲームオーバーは死と同じ痛みを味わうのと同値って頭おかしいだろ。それに一度死んだら復活できるかどうかも分からない。

……多分、復活できないんだろうなぁ。

だが始まってしまったものは致し方あるまい、今更どう騒いだ所で元の世界に帰れるわけでも無いだろうしな。

死にたくなければ、このサバイバルを生き抜かなくてはならない。それだけは覚悟しておくとしよう。

さて、気持ちを切り替えようじゃないか。

少しも役に立たないステータスは置いておくとして、次に聞こえたものを……。

ってあれ？　あの機械音声はなんて言っていたんでしたっけ。

早くも思い出せなくなったな……。

俺はその場で誰にも見つからないよう、身を潜めながらも先程起きた出来事をゆっくりと回想していく。

確かだ、うろ覚えでしか無いが――特性、ソウルイートを習得しましたと言われた気がする。

後もう一つ何か特性を獲得していたと思うのだが、忘れてしまったな。こればかりはどうしようもないな、今後ステータスが確認できる機会があれば、確認してみるとするか。

特性ソウルイートか……、普通に訳せば〝魂を食べる〟という様な意味になるだろう。

だけど〝魂を食べる〟特性など、何の役に立つのだろうか。魂を食べれば食べる程成長できるとかなのか?

稀にスキル吸収などのチートスキルを持った主人公のラノベとか読んだことがあるが……、その手のものとはあまり考えられない気がする。

そもそもこの世界にスキルという概念自体が存在するのか分からないし、これも一先ず保留としておきますか。

では……、情報整理も終わったことだし移動しようか。

ともかくまず第一にしなくてはならない事、それは安全地帯を探すことだ。魔物が近寄りづらそうな場所を探すことである。

ＲＰＧで言う宿屋的ポジションだな、あれがなければ幾らレベル上げがしたくとも、

非常に難しくなってしまう。
まぁ、回復スペースが無くともレベル上げは出来なくはないけど……、そんなゴリ押しプレイは今回に関しては自分の命を投げ捨てるに等しい。
チキンにチキンを重ね、慎重に敵を狩らなくてはな。
気持ちの整理が付き、俺は恐る恐る洞窟の岩陰から出てみる。
すると、突然俺の目の前に何やら緑色の塊が飛んで来たのだ。
これはマズい、と身体が危険を察知したのか、俺は咄嗟にその緑色の塊を躱した。
その緑色の何かは俺の真横を通過していく、そして先程まで俺が隠れていた岩に当たると、白い煙が上がる。
岩の表面は抉るかのように溶かされ、何者かに破壊されたかのようなクレーターが出来上がったのだ。
さ、酸だと!?
この予感、また別の魔物なのか？
見ると、そこには俺よりも少し大きく、透き通った緑色の身体をした不定形の魔物がいた。
あのぷるぷると弾力性があり、アメーバの様な液体状の身体。
間違いない、アイツはかの有名なスライムじゃないか……。

第５話　『喰魂』の力

俺が出てくるのをずっと待っていたのだろうか、突如として姿を表したスライムはふるふると身体を震わしながらも、俺の様子を伺っている。

丸みを帯びていて、つるつるとしていそうな身体の割には、その色は毒々しい。

一難去ってまた一難とはこの事だな。

俺は心中で薄ら笑いを浮かべ、戦闘態勢を取るとそのスライムと対峙した。

そう言えば、この瞬間になるまで自分でも気づいていなかったが、あの全身を焼き尽くすような痛みは消え、俺の身体である火の大きさは元通りになっている。

考えられるのは１つ、どうやらレベル上昇と共に俺のステータスは全回復した様だ。

大量の縛りを設けたプレイの中でも唯一息抜きとなるシステムって事か。

もしスケルトン戦で受けた負傷が残っていたのなら、俺は直ぐ様この場から逃げ出していただろう。

だけど、生憎今の俺は宿屋で起き上がり、「ゆうべはお楽しみでしたね」と店主に言われたばかりの勇者その物だ。

受けてやろうじゃないの、その戦い。

向こうも戦う覚悟を決めたのか、スライムはひょこひょこと跳ねると体内から、２つほど緑色の酸を射出してきた。
一瞬にして、２メートル弱はありそうな岩を半分溶かしてしまうほどの酸だ。
人魂とは言え、物理攻撃が効く今、あの酸に当たったらジ・エンドだろうな。
俺は放射線を描いて飛んでくる酸の着弾点を予想し、上手く躱す。
ステータスが上昇したおかげか、俺の動くスピードも速くなった気がする。
攻撃が当たれば死亡する可能性あり、だがそんな攻撃当たらなければどうという事はない！
やはりスライムは液体状という事もあってか、スピードはかなり遅いようだ。
となると酸さえ避けれてしまえば、先のスケルトン程の警戒はする必要はないだろうな。
だけどここでも、問題なのは俺の攻撃手段である。
人魂なんだから魔法くらい使えてなんぼだろうがぁ！　と言いたい所だけど、俺は転生したばかりだ。
魔法の使い方なんて知らん。そもそも、魔法自体が存在しない世界かもしれないからな。
となると、やはりここでも突進か……。

嫌なんだよねあの突進、凄く痛いから。

それに、あのスライムに突進して本当に大丈夫なのだろうか？　スライムの身体全てが酸で出来ているなんて事になれば、突進した瞬間にジ・エンドだ。

見た所、あのスライムの身体の構造は体液を包み込むように薄い膜で保護している感じだ。

それが歩く度に体液や酸を撒き散らさない要因だろうな。どんな仕組みかは知らないけど……。

だとすると、突進してもあの膜が破裂しない限りは大丈夫そうだな。

よし、人生は賭けだ。やれるだけの事はやってやるぜ！

意識を突進する事に集中させると、俺はスライムだけを見つめる。

しかし、俺が奴に向かって攻撃を仕掛けようとした――その時だった。

スライムはぴょこっ、と跳ねると俺と同じくらいの大きさにもなる火の玉を俺を目掛けて飛ばしてきたのだ。

しかも、スピードは先程の酸とは比べ物にならない位速い。

――うぉい!?　マジかよ！

我に返って躱そうとした時には既に遅かった……。

その火の玉は俺の身体に激突すると、爆弾の如く破裂し、俺を意図も容易く吹き飛ば

した。

あっつい……！

熱い熱い熱いっ！　どんだけ熱いんだよあの火の玉、というか人魂の癖して火の攻撃が効くとか随分と皮肉な設定じゃないかよ！

それと、突然出てきた所を見るに、あれがいわゆる魔法って奴なんだろうな。

想像していたものとは結構かけ離れているけど、やはり凄いな……。何もない所から何かを生み出す力、憧れるぜ。

爆風によって地面に落下した俺は思考を高速回転させながらも、燃えるように痛む身体を起こすと、直ぐに態勢を整えた。

なぜなら、既に俺の頭上には沢山の酸が雨の如く、降り注がれようとしていたからだ。

咄嗟に意識を全身に集中させると、俺は出来る限り加速してその酸を全て避けていく。

酸は俺に当たること無く地面に落ちていく。だがその後、勢いよく岩肌を溶かしていき、大量の白い煙を上げた。

そのせいで、視界の半分以上が遮られ、周りは何も見えなくなってしまう。

チッ……、あのスライム相当な策士じゃないか。

どうする。何か無いのか？　魔法で敵の居場所を感知するみたいな能力は。

駄目だ、考えるんじゃない、感じるんだ。俺のエロとゲーマー人生で養われた勘はそんな物なのか……！

目をつむり、今持てる感覚全てを研ぎ澄ました。

物理法則も成り立たなそうなこの世界、何が起きるか分かったものじゃない。ならその俺の知らない、全く別の可能性に賭けたっていいじゃないか。

何も見えない、だけど何故か何かを感じる。

俺の右斜め前――仄かだけど小さな青白い炎がある気がする。

感じる、なるはずのない鼓動を。感じる、燃え上がる生命（いのち）の力を。

――そこだっ！

白いモヤが全ての景色を遮る中、俺は右斜め前方へと向かって突進した。

弾丸の如くモヤを突き抜け、その先にはあの緑色のスライムが呆然と佇んでいる。

――いっけぇぇぇぇ！

そして、俺の身体は見事スライムに命中した。

スライムは凄まじい衝撃によって、大きく身体を変形させるとそのまま虚空に放り出され、地面をコロコロと転がっていった。

だが致命傷には至っていないのか、ふるふると身体を震わせながら、再び態勢を整え始める。

……今の突進を耐えるか。
スライムが柔らかかったおかげもあって、俺へのダメージはそれ程じゃなかった。
徐々に小さくなっていく身体の大きさから考えても、今程度の突進なら後3発は間違いなくうてるだろう。
この勝負貰ったな。
勝ちを確信したその瞬間だった、俺の意識の中に奇妙な感覚が流れ込んできたのは。

『食べたい』

その言葉が意識を埋め尽くし始めるかのようにグルグルと回り始める。
食べたい……、俺はお腹が空いているのか？
でも口もない状況で何を食べろっていうんだ。

『タ……イを食べたい』

お腹がある訳でもないのに、空腹感が込み上げてくる。まるで自分ではない何者かが指示しているかのように、腹の音が心中で鳴り響いた。

その突如として現れた異常な衝動は、徐々に俺の意識を侵食していく。そして、挙げ句の果てに俺は――

『タマシイを食べたい』

凄まじい勢いでスライムに襲いかかっていた。

幻覚だろうか、スライムの身体の中心にはあの時、水面を覗き込んで見えた小さな青白い炎が見える気がする。俺のように目はなけれど、それは今にも消えそうに揺らいでいた。

『魂を食べたい』

気づいたら、俺はスライムの懐に飛び込んた。

まるでスライムの核のように揺らぐその炎を見えざる手で掴むと、馬鹿力で引き剥がしていたのだ。

そして、スライムの炎をその手にした俺はそれを迷わず自分の中に取り込む。

すると次の瞬間、仄かな甘味が意識の中に広がっていき、自然とあの悍ましい衝動も

消え失せていく……。

【特性『喰魂（ソウルイート）』を発動。個体、スライムＬＶ１の魂を変換率５％で吸収しました】

【現在、種族スライムの魂分析率３％】

……っはぁ、はぁ。

危ない、危ない、意識がどっかに飛んでいくかと思った。

それに何だったんだ今のは――急に魂が食べたくなったと思ったら、凄まじい衝動に襲われて……。

――でも、何となく分かったぞ。

この特性『喰魂（ソウルイート）』ってのは他人の魂を食べたくなる特性って事か。なかなかどうしてとんでもない特性じゃないか。

ふと見ると、俺の足元にはもともとはスライムだったと思われる緑色のゼリー状の何かが転がっていた。

俺に魂を食べられてしまったのだからな、当然か。生きていたら、それはそれで怖いけどな。

【経験値が一定値に達しました。当該個体、ヒュウガは人魂ＬＶ２から人魂ＬＶ３に上昇しました】

【各種基礎ステータスが上昇しました】

時間差だったけど、どうやらレベルも上ったみたいだな。
先程まであったあの火傷の様な痛みは消え、その上に俺の身体も更に大きくなった気がする。
なるほどな、ソウルイートか。
何か変換率や魂分析率がどうたらこうたらとか言っていたけど、それは一先ず置いておくとしても、これは凄い能力かもしれない。
下手したら……、即死チートとかにも化けたりしてな。
誰もいなくなった洞窟の通路、そこで俺は独り心の中で不敵に笑うのだった。